種子島のサーファー移住

――自然の発見と新たな人間的結合の創出――

内　藤　考　至

1　目的

過疎・離島研究の一例として，種子島のサーファー移住を取り上げた。一口に過疎・離島と言っても様々な側面がある。統計的に数字で表わされたものは構造的な一側面であり，その背後で人は多様な生き方をしている。移住サーファーも，そのような生き方の一つである。種子島には，波を求めて全国からサーファーが移住して来ている。その数は定かではないが300人くらい居るのではないかと言われている。

この社会現象に注目したのには，いくつかの理由がある。

過疎地域・離島は人口減少と高齢化が深刻であり，それは1960年代以降，進行し続けている社会問題である。若者は職と都市の華やかさを求めて流出し続けている。そのため，地域の生産年令人口が減少し，特に中山間地では挙家離村や地域崩壊と言われるような現象も起こっている。自治体も地域も人口流出を食い止めるために必死の努力をし続けているが，現在も流出は続いている。都市へ向かう人口の大勢に対して，よく見ればそれとは逆の動きがある。農家の後継ぎのUターン現象や，都市就業者の農業への新規参入などがその代表的なものである。

流入現象でもサーファー移住はユニークである。彼らは職を求めて移住したのではなく，種子島の波を求めての移住である。環境問題が時代の焦眉のテーマとなり，自然が注目され，自然の価値が高まっているが，波という自然を求めての大量移住はめずらしい。離島は地理的に大きなハンディを負い，経済的に人口を誘引することはなかなか困難であるが，離島の波というそのままの自然が人口の移住を引き起こすことは注目される。自然の新たな価値の発見である。

都市就業者の農業への新規参入は，職を求めての転職であるが，サーファー移住は，生きがい（趣味）を求めての移住である点で特異である。生きがいが仕事よりも優先し，そのために生活構造を根幹から変えている。生活が目的で，趣味（生きがい）がそれに従属するのではなく，生きがいが目的であり，生活は手段である。労働や勤勉の価値が揺らぎ，生きがいが重要視され始めた，また，「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」が求められる時代の変化を，サーファー移住は象徴的に示している。

人口流出の続く過疎地域や離島に，若者が大量に全国から自然発生的に流入してくること自体が注目に値する。関東や関西の大都市圏にも多くのサーファーがいるが，彼らの全てが移住するわけではなく，サーファー移住するのはそのごく一部である。彼らは移住によって生活構造を根幹から変える。同一の人間が移住することによって，どのようにその生活構造が変化し，

人間関係が変わっていくかは，都市と過疎地域・離島との差異を比較する上で興味がある。

以上の点に注目して，具体的には，次の観点から調査を行った。調査の最も中心的なキーワードは人間的結合と自然である。サーファー移住がどのような新たな人間的結合を形成するかを明らかにしたい。サーファー・コミュニティ，地域，過疎の活性化，サーファー文化などが，直接これに係わる。それに関連する項目として，サーフィンのきっかけ，生活，心理，離島の魅力，人生観，社会観，自然観などを取り上げた。調査は2003年８～９月に行った。

２　中種子町と南種子町の概況

人口

	15歳未満	15～64歳	65歳以上	計
中種子町	16.4	55.7	27.7	100％(9,675人)
南種子町	18.2	55.8	25.3	100％(7,154人)

産業構造

	１次産業	２次産業	３次産業	計
中種子町	39.4	15.7	44.9	100％(5,247人)
南種子町	29.0	22.7	48.3	100％(3,797人)

種子島は，西之表市，中種子町，南種子町の一市二町からなる。西之表市は鹿児島市の南方115キロメートルに位置する。種子島は，歴史的には鉄砲の伝来で，最近では南種子町の宇宙センターで有名である。産業としては第一次産業が中心で，サトウキビ，甘藷，たばこ，米などが主要作物である。周囲が海で囲まれており漁業も盛んで，イセエビなども獲れる。

人口構成は，中種子町と南種子町とはよく似ている。年少人口は16％～18％で，2000年国勢調査の全国平均15％よりも少し高い。65歳以上の老年人口は25％～28％と高く，全国平均の17％を超え，高齢化が進んでいる。年少人口を老年人口が上回っている。生産年齢人口の全国平均は68％であるが，両町ともそれをかなり下回り，56％である。人口は減少傾向にあり，平成７年に比べて平成12年は，中種子町が3.5％，南種子町が3.6％の減少である。

産業構造としては，両町とも３次産業人口が最も多いが（45％～48％），次いで多いのが１次産業であり，中種子町は39％，南種子町は29％である。特に，中種子町の割合が高いが，両町とも農業，漁業が中心の産業である[1)]。

３　サーファーの属性と事実

年齢を見るとサーファーという性質上，20代と30代に集中しており，20代が51％と５割強を占め，ついで30代が39％と４割弱である。20代と30代で，全体の約９割である。それ以外では，40代が９％，50代が１％ある。10代は皆無である（質問１）。一部の人を除いて，サーファー移住が普及し始めて５～10年くらいしか経っていないこと，また，永住的移住ではなく，数年間の一時的移住があることも，20～30代に集中している原因だと思われる。40代，50代の人はサーファー移住の先駆者であろう。

性別をみると（質問２），男子が63％，女子が37％，である。予想外に女子の移住者が多い。サーフィンは女子にも普及していることが分かる。私が調査でお世話になった数名のサーファーの内，二人は女性であった。一人の女性は鹿児島県の出身であり，もう一人の女性は名古屋の出身であった。

彼らはどこから移住して来たのだろうか（質

[1)] 鹿児島県企画部統計課『平成14年　鹿児島県統計年鑑』鹿児島県統計協会，2003年11月，36～39頁，54～55頁

問３)。多い順に挙げると次のようになる。大阪22%，東京12%，京都10%，鹿児島８%，兵庫７%，福岡６%，奈良，滋賀４%，埼玉，千葉，山形，北海道，静岡，関西３%，群馬，和歌山，熊本，岡山，沖縄，島根，愛知，神奈川１%，である。対象者の総数76名が，北海道から沖縄を含む22都道府県から来ており，広く各地から移住している。鹿児島県は地元であるから，それを除けば大都市圏からの移住が多い。関東や関西の大都市圏にもサーフィンの場はあるが，サーフィン人口が多く，順番待ちのような状態であり，また波取りが競争になるので，より自由にサーフィンが出来る場として種子島が選ばれたことが，移住の理由の一つであった。さらには，大都市圏からすれば，その対極としての離島に大都市にはないロマンを感じて，移住が行われている。出身地を市町村別にみると，市出身が84%，町出身が16%，村出身は０%，である。この数字は，大都市圏出身者が多いことと符号している。

移住してどのくらい経っているかをみると(質問４)，各年数に分散しているが，６年以上が26%，２年が24%と，この二つが最も多く，全体の５割を占める。６年以上の中味をみると，10年以上が全体の10%あり，６年以上の人は永住を志向していると思われる。移住年数をより詳細にみると次のようである。２カ月（4.1%），４カ月（1.4%），６カ月（5.4%），１年（6.8%），1.5年（2.7%），２年（21.6%），2.5年（2.7%），３年（6.8%），４年（14.9%），５年（6.8%），５～６年（1.4%），６年（6.8%），７年（2.7%），８年（5.4%），９年（1.4%），10年（1.4%），11年（4.1%），13年（2.7%），33年（1.4%），である。最小２カ月から最大33年までの期間に亘っており，一口にサーファー移住と言っても，その定着性や流動性には著しい多様性がある。

移住者の現在の家族構成はどうであろうか(質問５)。一人暮らしが40%と最多である。若い独身の自由が大きいときの移住が多い。彼らが今後，結婚して定着するのか，あるいは独身の間だけの移住で後には島を出ていくのかは予測できないが，彼らのあり方によってサーファー移住の意味は大きく変わってくる。次いで多いのが，夫婦と子の26%と夫婦の21%，である。これらの家族は，一人暮らしと違ってすでに家族を形成しており，また夫婦ともサーファーである場合が多いだろうから，定着性は高いと思われる。サーファー移住が独身の身軽な時の一時的なものだけでなく，家族ぐるみの永住的なものもあることを，この数字は示している。サーファー移住は独身時代の趣味や遊びを中心としたものだけでなく，家族という生活を抱えた移住でもある。サーファー移住には，一時的な流動的移住と永住的な定着的な移住の二つのタイプがある。

移住者の教育をみると次のようである（質問６)。高校卒業が最も多く55%である。専門学校13%，中学，短大８%である。大学卒は16%である。社会全体の平均に比べて大学卒が少ないのは，教育→職業の連関において，大学卒はそれだけ社会構造に組み込まれ，自由が少ないためであろう。サーファー移住のような，好きであることや趣味を目的とした移住は，それだけ多く社会構造からの自由を必要とする。そのことが高校卒業の学歴を最多としたのであろう。高い学歴は，一方ではそれだけ社会構造の拘束を受け，不自由を意味することを示唆している。

移住前の仕事形態はどうだろうか（質問７)。パート・アルバイト・フリーターが46%，正社

員が44%，である。この二つで9割である。その他では，無職4%，学生，自営が3%，である。パート・アルバイト・フリーターや無職，学生，自営などの，自由のきく就業形態がサーファー移住を行いやすくしている。その一方で，正社員が44%あることは注目される。正社員であることを辞してまで移住するのは，サーフィンの魅力が生活を凌駕したことを示している。仕事と生きがいとの関係を考える上で重要であり，時代の変化を読み解く上でも意味がある。

彼らの移住前の仕事をみると次のようである（質問8）。商業・サービス業が37%，次いで工業・建設業が30%，とこの二つが圧倒的に多く，合わせて67%と三分の二を占めている。これらの仕事は就業形態として，パート・アルバイト・フリーターなどの一時的就業が行いやすいからである。他の仕事はこの二つに比べればずっと少なくなっている。自営が9%あるが，これも自由のききやすい仕事である。他では，団体職員，漁業が3%，公務員，農業が1%あるが，これらの移住はよほどサーフィンの魅力にとりつかれないと困難であろう。特に，公務員と団体職員の場合はそうであろう。学生が3%あるが，まだ就職していないだけに移住は楽であろう。

〔サーファーの属性と事実〕

質問1　年齢

10代	20代	30代	40代	50代	計
0.0	50.7	38.7	9.3	1.3	100%(75)

質問2　性別

男	女	計
63.2	36.8	100%(76)

質問3　出身県

大阪21.9%，東京12.3%，京都9.6%，鹿児島8.2%，兵庫6.8%，福岡5.5%，奈良・滋賀4.1%，埼玉・千葉・山形・北海道・静岡・関西2.7%，群馬・和歌山・熊本・岡山・沖縄・島根・愛知・神奈川1.4%

質問3　出身地

市	町	村	計
84.0	16.0	0.0	100%(75)

質問4　移住してどのくらい経つか

1年未満	1年	2年	3年	4年	5年	6年以上	計
10.9	9.5	24.3	6.8	14.9	8.2	25.9	100%(74)

質問5　今の家族構成

一人暮らし	夫　婦	夫婦と子供	三世代(親・夫婦・子)	その他	計
39.7	20.5	26.0	1.4	12.3	100%(73)

質問6　どの学校を出たか（中退を含む）

中学	高校	専門学校	短大	大学	計
7.9	55.3	13.2	7.9	15.8	100%(76)

質問7　移住する前のあなたの仕事の形態はどうか

正社員	パート・アルバイト・フリーター	学生	無職	自営	計
44.4	45.8	2.8	4.2	2.8	100%(72)

質問8　移住する前のあなたの仕事は何か

農業	漁業	工業・建設業	商業・サービス業	公務員	団体職員
1.3	2.6	29.5	37.2	1.3	2.6
自営業	学生	無職	その他	計	
9.0	2.6	3.5	10.3	100%(78)	

質問9　現在のあなたの仕事の形態はどうか

正社員	パート・アルバイト・フリーター	学生	無職	自営	計
24.6	56.5	0.0	13.0	5.8	100%(69)

質問10　現在のあなたの仕事は何か

農業	漁業	工業・建設業	商業・サービス業	公務員	団体職員
8.4	7.2	18.1	28.9	2.4	2.4
自営業	学生	無職	その他	計	
12.0	0.0	12.0	8.4	100%(83)	

現在の仕事の形態について聞いたのが質問９である。パート・アルバイト・フリーターが57％と最も多い。次いで，正社員の25％である。他はずっと少なくなって，無職13％，自営６％である。移住する以前と比べて増えたのが，パート・アルバイト・フリーターが11％，無職が９％，自営が３％，である。逆に減ったのが，正社員が20％，学生が３％である。主に正社員がサーファー移住によって，パート・アルバイト・フリーター，自営へと仕事形態を変えるか，あるいは無職となったのである。サーファー移住は仕事の大きな転換によって可能になったことが分かる。この人達にとっては，サーフィンはそれだけの犠牲を払うだけの魅力のあるスポーツである。

現在の仕事をみると（質問10），商業・サービス業29％，工業・建設業18％，自営業12％などが多い。無職も12％と多い。その他では，農業８％，漁業７％，公務員，団体職員２％，である。移住前の職業と比べると，減少したのが，工業・建設業の11％，商業・サービス業の８％，自営業の３％，学生の３％，である。逆に増えたのが，農業の７％，漁業の５％，自営業の３％，公務員の１％，である。移住以前に工業・建設業や商業・サービス業に携わっていた者が，サーファー移住によって，島の基幹産業である農業や漁業へ入った者が最も多く，島の産業の若い労働力として貢献していることが分かる。農業や漁業への入り方は，新規参入の場合もあるだろうし，またパートの場合もあるだろう。それ以外では，自営業への参入が少し増えているが，これはサーファー・ショップや飲食店などであろう。公務員と団体職員にほとんど増減がないのは，仕事は変えずに，サーフィンのために場所を変えたのであろう。移住前，学生であった者もこちらに職を求めているので，過疎化の中での若者の移入として注目される。

4　サーフィンのきっかけ

彼らがサーフィンを始めた時期をみると（質問11），社会に出てからが59％と最も多く，６割弱がそうである。サーフィンは身近で手軽に始められるスポーツではなく，波のある場所を求めて車で移動しなければならないし，また装備一式にも一定のお金が掛かるので，若い学生時代に始めるのには無理があり，そのため社会に出てからが一般的である。大学時代（12％）よりも高校時代（21％）に始めた者が多いのは，身近に海とサーフィンに適した波があり，生活環境の中でサーファーに接していたからであろう。中学生の５％，小学生の３％もそうであろう。

サーフィンを始めたきっかけは（質問12），友人が最も多く62％である。６割強の人は友人に誘われて始めている。この割合は，始めた時期として社会に出てからの割合とほぼ符号しており，社会人になって友人に誘われて始めたと思われる。サーフィンを見てが21％，兄弟に誘われてが５％あるが，これらは高校生，中学生，小学生のとき始めたのと対応しているのだろう。その他が10％あるが，その理由としては，「人

〔サーフィンのきっかけ〕

質問11　サーフィンを始めたのはいつか

小学生	中学生	高校生	大学生	社会に出てから	計
2.6	5.3	21.1	11.8	59.2	100％(76)

質問12　サーフィンを始めたきっかけ

兄弟にさそわれて	友人	サークル	サーフィンを見て	その他	計
5.2	62.3	1.3	20.8	10.4	100％(77)

魚の気持ちを知りたくて」「もてると思ったから」「せんぱい」などである。サークルも１％ある。学校では，まだサーフィン・サークルはあまり普及していないのではないかと思われる。

5　移住

サーファー移住は，普通の移住よりもいろいろな面で大きな変化を伴う。職業や住環境，人間関係などが根幹から変動するからである。そこで，移住による，仕事，生活，人間関係などの環境の変化に不安があったかを聞くと，不安があった45％，不安はなかった55％，である(質問13)。これだけ大きな生活環境の変化にもかかわらず，不安はなかった方が10％多い。移住前，正社員は44％と半分以下であったことと関係しているのだろう。正社員の44％は，不安があったの45％と数量的には一致する。移住前，パート・アルバイト・フリーターが46％と最多であり，無職４％，学生３％，自営３％と半数以上がより自由な就業形態であったことが，移住が不安を伴わなかった原因だろう。サーフィンを生きがいとする生活は，パート・アルバイト・フリーターの時間的にも人間関係的にもより自由な就業形態と適合的である。

サーファー移住が一時的な移住なのか永住なのかをみると（質問14)，数年間が48％，一生44％，の二つに集中する。他は，若いときのみ６％，数ヶ月と１年間が１％である。一時的な移住と永住の二つのタイプにほぼ半々に分かれる。永住が半数あることは注目される。離島という人口がより流出し，高齢化が進行しやすい条件の中で，若いサーファーの移住は一時的ではあっても大きな貢献をするが，永住が半数近くもあることは，サーファー移住は離島の活性化における重要な人間的財産であるだあろう。

一時的な移住の理由をみると（質問15)，その他が39％と最多であり，その理由は分からないが，それ以外では，自分の職業選択が28％，将来の生活不安が22％であり，この二つの理由が全体の５割を占める。一時的な移住理由としては，生活の根幹である仕事や将来の生活不安に係わるものが中心である。離島の経済的条件の中で生きていくのは大変なのである。彼らの現在の仕事が，パート・アルバイト・フリーターが57％，無職が13％であるという実態は，この事実を如実に示している。量的に少ないが，生活が大変が７％，子供の将来が４％，ある。これらから判断すると，一時的な移住としては，自分の仕事，自分と子供の将来，現在の生活の大変さが，その理由である。これらは，離島それ自体が抱える問題でもある。

もし，離島が抱える特有の困難な条件を除いたとき，彼らはどのように反応するのだろうか

〔移住〕

質問13　移住による，仕事，生活，人間関係などの環境の変化に不安はあったか

不安があった	不安はなかった	計
44.7	55.3	100(76)

質問14　どの程度の期間，移住するか

数ヶ月	1年間	数年間	若いときのみ	一生	計
1.4	1.4	47.8	5.8	43.8	100%(69)

質問15　一時的な移住はなぜか

生活が大変	子供の将来	将来の生活不安	自分の職業選択	その他	計
6.5	4.3	21.7	28.3	39.1	100%(46)

質問16　条件がゆるせば種子島に一生住みたいか

そう思う	思わない	計
83.7	16.3	100%(43)

(質問16)。そこで,「条件がゆるせば種子島に一生住みたいか」と聞くと,一生住みたいが84%,そうは思わないが16%,である。仕事や,自分や子供の将来,生活の大変さということがなければ,彼らのほとんどは種子島に住みたいと考えている。文化的には,多くの娯楽施設や人工的な刺激を備えた都市生活に憧れているのではない。一般的には若者の多くは,都市的文化に憧れて過疎地域から流出していくが,彼らはサーフィンという自然と一体化したスポーツを愛好しているため,都市の人工的文化よりも自然の文化に志向している。

6 生活

サーファー移住は,転勤などの通常の移動とは異なって,サーフィンという生きがいを中心として生活自体を変えることであるから,生活構造の根幹的な変動を伴う。そこで直接,生活について質問した。「移住前に比べて,暮らしはどちらが楽か」と聞くと(質問17),今の方が楽が48%,移住前の方が楽が26%,かわらないが26%,であった。移住前よりも今の方が楽が22%も多く,5割弱が今の方が楽だと思っている。移住前に比べて,正社員が減り,パート・アルバイト・フリーターや無職が増えたにもかかわらず,この結果が出たのは,都市に比べて離島の方が家賃や交通費,生活の仕方などにおいて,生活費が少なくても生きられるからだろう。「島の生活は金がかからない」と話していた。一人暮らしが40%あったが,フリーターとして農業や漁業に係わることで,それほど困らずに生活している。

今の生活の不安感についてみると(質問18),少し感じるが59%,感じないが37%,強く感じるが4%,である。不安を強く感じるは僅かであるが,少し感じるが6割弱ある。前の質問では,移住前に比べて今の方が楽が48%と最多であったが,それでも不安を少し感じるが多いのは,彼らの就業形態が主にパート・アルバイト・フリーターなどの不安定就業であるからだろう。それでも,不安の程度が強くではなく少しでしかないのは,離島の生活条件が穏やかだからであろう。彼らの就業形態から考えれば,不安を感じないが4割弱あることは注目される。

〔生活〕

質問17 移住する前に比べて,暮らしはどちらが楽か

移住前の方が楽	今の方が楽	かわらない	計
26.0	47.9	26.0	100%(73)

質問18 今の生活に不安を感じるか

強く感じる	少し感じる	感じない	計
3.9	59.2	36.8	100%(76)

7 心理

心理状態の変化についていくつかの質問をした(質問19)。日頃のさびしさについてはどうであろうか(質問19−1)。移住前と今とでは,かわらないが78%と最も多い。4分の3は,日頃のさびしさには変化がないと感じている。移住前の方がさびしいが18%,今の方がさびしが4%であり,全体的には多くはないが,それでも,移住前の方がさびしいとする者が今の方がさびしいとする者よりも15%ほど多い。人口の多さや娯楽施設の多彩な華やかさという点では,都市に比べて離島は圧倒的に不利だが,そのことが日頃のさびしさとは直接結びついてはいない。多くの移住サーファーは,さびしさについては以前と変わらないと感じ,一部は以前の方がさびしと感じている。今の方がさびしいはご

く僅かである。

日頃の不安についてはどうであろうか（質問19－2）。かわらないが54％と最も多い。今のほうが強いが29％，移住前の方が強いが17％と，移住前よりも今の方が強いが12％多くなっている。心理状態に対する質問で，この項目だけが移住前よりも現在の状態をより否定的に評価している。それは，以前よりも今の方が，就業形態において，パート・アルバイト・フリーターなどが多く，都市との生活様式の差において，今は生活ができても，将来的には仕事の不安がどこか付きまとっているのではないかと思われる。

日頃の孤独感はどうであろうか（質問19－3）。かわらないが66％と最も多く，3分の2が変化はないと感じている。移住の前後を比べると，移住前の方が強いが21％，今の方が強いが13％，である。移住前の方が強いが僅かに8％ほど多い。孤独感は主に人間関係のあり方に係わるであろうが，都市の多くの刺激はそれを補償してはいないように思われる。離島は人口も少なく，華やかさにも乏しいが，外見的な印象から受けるイメージとは違って，波という自然が好きなサーファーにとっては，離島のこれらの条件は孤独を感じさせるものではない。

日頃のストレスについてはどうであろうか(質問19－4)。かわらないが34％と，全体の3分の1である。変化した方が多いが，その変化の仕方は，移住前の方がストレスが強いが58％，今の方が強いが8％，である。現在よりも移住前の方が50％も多くストレスを感じている。さびしさ，不安，孤独感に比べて，著しく多くストレスを感じている。ストレスの特定の原因は分からないが，これだけ多くがストレスを感じていたということは，共通の環境，つまり都市的環境に起因するのであろう。人間関係，居住環境，生活空間，生活のテンポ，人口密度，自然環境，人工的刺激などは，多くのストレスを与えていたのだろう。そのまま都市的生活に染まっていれば，そのことはあまり自覚されなかったのかもしれないが，離島に移住してみて，そのことが顕在化したのであろう。都市と離島という対極の生活体験は，生活環境の意味を強く実感させるであろう。

日頃の不満感についてみると（質問19－5），かわらないが42％であり，6割弱は変化している。日頃の不満感が，移住前の方が強いが53％，今の方が強いが5％，である。圧倒的に多くが，移住前の方が日頃の不満感が強かったと感じている。ストレスとはぼ同じような傾向が出ており，心理的には，都市に比べて離島の方がより穏やかな生活が送れることが分かる。

心理的には，移住の前後を比べれば，不安を除いて，いずれも移住後の方がより安定している。心理的観点からみれば，離島は人間的自然に適したより住みやすい所であるという結果が出ている。

〔心理〕

質問19　移住前と今とを比べて，心理的にはどうか

19-1 日頃のさびしさ

移住前の方がさびしい	今の方がさびしい	かわらない	計
18.4	3.9	77.6	100％(76)

19-2 日頃の不安

移住前の方が強い	今の方が強い	かわらない	計
17.1	28.9	53.9	100％(76)

19-3 日頃の孤独感

移住前の方が強い	今の方が強い	かわらない	計
21.1	13.2	65.8	100％(76)

19-4 日頃のストレス

移住前の方が強い	今の方が強い	かわらない	計
57.9	7.9	34.2	100%(76)

19-5 日頃の不満感

移住前の方が強い	今の方が強い	かわらない	計
52.6	5.3	42.1	100%(76)

8　サーファー・コミュニティ

サーフィンそれ自体は個人的なスポーツであるが，同じ愛好家として，どのような仲間意識や連帯があるのかをみた。人間関係の連帯のあり方は，彼らの人生観や心理状態にも影響を与えるだろう。

人間関係の一つとして，サーファー友達は何人いるかを尋ねた（質問20)。いないは１％にすぎなく，誰もがサーファー友達を持っている。友達の人数は特定のグループに集中することなく分散している。多い順にみると，41人以上が26%，11～20人が24%，21～30人と６～10人が14%，31～40人と１～５人が10%，である。全体的に友達は多く，10人以上の友達をもつ者は74%と，全体の４分の３がそうである。一般に比べて友達は多く，サーフィンをすることは多くの同士的友達の形成を可能にすることが分かる。20人以上の友達がいるも５割を占めており，サーフィンは強い友人的連帯を作り出している。現代社会で友達をもつこと，あるいは人間的連帯を作り出すことはなかなか困難であるが，サーフィンはその重要な契機となり，このことが，離島で孤独やさびしさを感じない大きな要因であるだろう。

中種子町と南種子町のそれぞれのサーファーに，自分の町のサーファーをどの程度知っているかを聞いた（質問21)。ほぼ全員が32%と最も多く，全体の３分の１を占めている。正確な数字は分からないが，地元のサーファーと移住サーファーを合わせれば両町で200人程度いるのではないかと思われるが，３割強がそのほぼ全員を知っているのは，そこに人間関係の広がりをみることができる。３分の２程度が27%，半分程度が24%，である。半分以上知っているを合わせれば83%となり，サーファー仲間はサーフィンを契機として多くの面識をもっている。それは，サーフィンということだけではなく，人口密度の低さ，地理的な狭さ，生活環境の単純さなどという離島的条件も影響しているであろう。一部の人しか知らないは12%，３分の１程度は５％と少ない。大都市の巨大な人口の中での面識の少なさとは対極の関係にあり，過疎の中での面識の多さという，量と質との矛盾である。

自分の住む町ではなくて，種子島全体についてどの程度サーファーを知っているかを聞くと(質問22)，やはり，自分の町に比べて面識度はかなり落ちる。半分程度と３分の１程度が最も多くそれぞれ30%であり，次いで一部の人が26%，３分の２程度が12%，ほぼ全員は３％に過ぎない。種子島には１市２町あるが，やはりこの壁は大きく自分の居住する地域を超えると面識度はずっと低くなる。だが，種子島全体では500人程度のサーファーがいるのではないかと言われているから，３分の１程度にしても，かなり多くのサーファーを知っていることになる。

サーファー同士の友人数や面識の程度ではなく，関係の内容をみると次のようになる（質問23)。多い順に，話し相手86%，サーフィン以外の遊びを一緒にする72%，サーフィンの技術の話70%，悩み事の相談63%，仕事の相談53%，

物のやりとり41%，金銭の貸し借り17%，である。全体的にみると，多様な内容をもった人間関係である。話し相手が最も多く，ほとんどのサーファー友達はこの関係をもっている。他所から離島に移住して来た者は，普通なら孤立しがちであるが，サーファー仲間としてお互いにコミュニケーションをとることによって，連帯を維持できる。サーフィン以外の遊びを一緒にすると，サーフィン技術の話をするが共に7割程度ある。お互いにサーファーだから，共通の関心事としてその技術について話し合うことは，友人関係の重要な契機となるであろう。サーフィンを契機として形成された友人関係は，それ以外の関係へと広がり，サーフィン以外の遊びもするようになり，人間関係は一段と深くなる。悩み事の相談が6割強ある。彼らは他所から移住しているから，既存の人間関係は消失しており，最初は友人関係もなく孤立している。そのような中で，いろいろな悩みを抱えても誰も相談相手がいないが，そのときサーファー仲間は悩み事の相談相手として助けとなる。家族があれば夫婦は重要な相談相手となるが，移住サーファーの場合一人暮らしが40%あったから，彼らにとってはサーファー仲間の意義は一段と重要である。仕事の相談が5割強ある。彼らは移住によって生活構造を根幹から変えたのだから，まず生活手段としての仕事探しは最重要課題である。現在の彼らの状態は，パート・アルバイト・フリーターが57%，無職が13%であるから，仕事についての悩みは深刻だと思われる。サーファー仲間はその重要な相談相手である。物のやりとりが4割強ある。付き合いの中で，関係が挨拶や話し相手の程度を超えると，物のやりとりという一段と深い関係に進んでいくが，それも一定程度ある。金銭の貸し借りは最も深い関係の一つであるが，それが17%ある。ふつうの地域の人間関係では，金銭の貸し借りは多くの場合皆無であるが，サーファー移住者の場合，仕事が不安定でること，同じ移住者としてお互いに頼れる者がいないこと，などの条件が金銭の貸し借りという他人同士ではあまり行わない関係を成立させているのだろう。

サーファー仲間と顔を会わす程度をみると(質問24)，かなりの頻度である。毎日が62%ある。次に多いのが1週間に数回で29%である。二つを合わせると9割となり，サーファーのほとんどは毎日のように顔を会わせていることになる。サーフィンをすることによって海で顔を会わすことが多いと思われるが，それだけではなく，離島という条件がそれを可能にしているのだろう。大都市における巨大な人口との物理的接触とは異なり，サーフィンを契機とした仲間という意味ある他者との接触であるから，毎日のような接触は人間的な結びつきという点で重要だろう。このような傾向からすれば，月に1回の4%は特異である。

移住する前と後とでは，サーファー仲間の数がどのように変化したかをみた（質問25)。今のほうが多いが77%，移住する前の方が多いが5%，である。圧倒的に移住後の方が増えており，その差は72%である。移住前後で同じくらいは17%である。8割弱の人は種子島に来てサーファー仲間が以前よりも増えている。同じサーフィンをしても，都市と離島では仲間の形成に決定的とも言えるような差異がでてくる。人間関係の形成という点において離島はきわめて好条件を備えていることが分かる。

次に，サーファー仲間との連帯は，移住する前と後とでは，どちらが強いかをみた（質問26)。その結果は，今の方が連帯が強いが68%，移住

する前が４％，である。７割弱が今の方が連帯が強いと感じており，移住する前の方が強いとする者との差は64％である。圧倒的に多くが今の方がサーファー仲間との連帯が強いと感じている。離島，過疎地域には，若者の流出による人口減少と高齢化の強いイメージが定着しているし，また，中山間地では人口減少による集落機能の不全のため，挙家離村による集落の崩壊が社会問題となっており，マイナス・イメージが強調されがちであるが，ここでは，サーファー仲間に限定されたものではあるが，人間的連帯という点では，都市に比べれば離島の方が優れている。多くの資源が不利である中で，人間的連帯は離島や過疎地域の貴重な財産である。

サーフィンを契機とした人間的連帯は，サーファー・コミュニティを形成してはいないだろうか。そのことを確かめるために次のような質問をした。「中種子町・南種子町には，サーファー・コミュニティが形成されていると思いますか」(質問27)。その結果は，形成されているが70％，形成されていないが30％，である。サーファーの７割がサーファー・コミュニティが形成されていると考えている。サーフィンは個人的なスポーツであるが，それを契機として人間的な連帯や仲間意識が形成され，サーファー・コミュニティにまで高められている。サーファー仲間で連絡網を作り，海の清掃や波止場の工事などに対する環境保護の運動，その他，サーフィンが終わった後のショップでのビールの飲みかたなど，多様な種類の人間関係を形成している。地域の共有を基礎条件としながらサーフィンを契機として，コミュニティが形成されている。人間的な連帯が希薄になりがちな現代社会において，この事実は貴重である。

〔サーファー・コミュニティ〕

質問20　サーファー友達は何人いるか

1~5人	6~10人	11~20人	21~30人	31~40人	41人以上	いない	計
10.0	14.3	24.3	14.3	10.0	25.7	1.4	100%(70)

質問21　中種子町・南種子町のサーファーをどの程度知っているか

ほぼ全員	3分の2程度	半分程度	3分の1程度	一部の人	計
32.0	26.7	24.0	5.3	12.0	100%(75)

質問22　種子島全体のサーファーをどの程度知っているか

ほぼ全員	3分の2程度	半分程度	3分の1程度	一部の人	計
2.7	12.2	29.7	29.7	25.7	100%(74)

質問23　サーファー友達との関係（該当するもの全てに○）

話し相手	サーフィン以外の遊びを一緒にする	サーフィン技術の話し	悩みごとの相談	物のやりとり	金銭の貸し借り	仕事の相談	計
85.5	71.7	69.7	63.2	40.8	17.1	52.6	304

質問24　サーファー仲間とはどの程度顔を会わするか

毎　日	1週間に数　回	1週間に1　回	月に数回	月に1回	計
61.6	28.8	4.1	1.4	4.1	100%(73)

質問25　サーファー仲間は，移住する前と今とでは，どちらが多いか

移住する前	今	同じくらい	計
5.3	77.3	17.3	100%(75)

質問26　サーファー仲間との連帯は，移住する前と今とでは，どちらが強いか

移住する前	今	かわらない	計
4.0	68.0	28.0	100%(75)

質問27　中種子町・南種子町には，サーファー・コミュニティが形成されていると思うか

形成されている	形成されていない	計
70.4	29.6	100%(71)

9　地域

彼らが移住によって，どの程度地域に溶け込んでいるか，あるいは，いないかを知るために，地域に関する質問をいくつかした。

移住前と種子島では，どちらが住みやすいかを聞くと（質問28），種子島が49%，移住する前が11%，であった。どちらともいえないが40%，である。種子島の方が住みやすいとする者が，移住前の方が住みやすとする者より，38%多い。住みやすさにはいろいろな条件が関わるが，５割が種子島を住みやすいと感じている。どちらともいえないが40%あるが，それをも凌駕している。住みやすさについて，いろいろな指標を設定し，それを数値化して比較することはよくやられるが，直接，二地点を移動した者が評価することはより体験的な意味をもつ。サーファー移住者が直接の体験を通して都市よりも離島を住みやすいと感じていることは，経験に基づくだけにその意味は大きい。都市と離島の住みやすさについては，単純な数量的指標による比較はできない。この点に関してはもう少し深い研究が必要だと思われる。

新しい地域にどの程度溶け込んでいるかをみるために，地域の自治会への加入を聞くと（質問29），入っていないが61%，入っているが39%，であった。６割強が自治会に加入していないが，これは一時的な移住や，移住してまだ年数が少ない者，例えば，移住年数をみると移住年数が２年以下が45%を占めていること，などによるのだろう。自治会への加入は，一時的移住か永住か，移住年数などによって影響されるだろう。サーファーがよそ者であるか，地域に溶け込んだかの基準の一つは，自治会への加入か否かによるだろう。４割の加入は，サーファーと地域との関係の現在の状況を示している。

地域の共同作業への参加状況をみると（質問30），共同作業に出ている48%，出ていない52%とほぼ半々である。自治会への加入が39%であったことと比べると，それよりも９%多く地域の共同作業に出ており，作業にはより協力的である。高齢化が進んでいる中で若者のこの協力は地域への貢献という点で価値があるだろう。自治会に加入しなくても地域の共同作業に出ているのは，指示されてからではなく自発的に協力しているのだろう。

地域の人との関係はどうであろうか。移住する前と後とを比べてみた。まず，移住する前についてみると次のようになる（質問31）。多い順に，挨拶をする83%，会話をする51%，お年寄りへの声かけ15%，仕事（農業・漁業など）の手伝い11%，悩みごとの相談９%，買い物などの手伝い８%，お年寄りの病院への送迎１%，である。かかわりあいがないが18%あり，三番目に多い。ほとんどが挨拶程度は行っているが，会話となるとぐんと少なくなり半数程度になる。挨拶，会話までが地域の一般的な人間関係である。それ以外は極端に少なくなり，他は全て10%台以下である。移住前の彼らの地域の人間関係は，挨拶程度が主で，会話が半数程度あるが，具体的な行動レベルとなると極端に少なくなる。表面的な軽い人間関係が主である。

では，移住後はどうであろうか（質問32）。移住前と移住後とを並べてみる。移住後を前に移住前を後に記す。挨拶をする（96%：83%），会話をする（79：51），仕事：農業・漁業などの手伝い（40：11），お年寄りへの声かけ（32：15），悩みごとの相談（20：９），買い物などの手伝い（11：８），お年寄りの病院への送迎（１：１），かかわりあいがない（３：18）。これをみると，移住前と後とでは地域の人間関係

〔地域〕

質問28　移住前と種子島では，どちらが住みやすいか

種子島	移住する前	どちらともいえない	計
49.3	10.7	40.0	100%(75)

質問29　地域の自治会に入っているか

入っている	入っていない	計
39.2	60.8	100%(74)

質問30　地域の共同作業に出ているか

出ている	出ていない	計
48.0	52.0	100%(75)

質問31　移住する前の，地域の人との関係（該当するもの全て○）

あいさつをする	会話をする	悩みごとの相談	買い物などの手伝い	仕事(農業・漁業など)の手伝い	お年よりへの声かけ	お年よりの病院への送迎	かかわりあいがない	計
82.9	51.3	9.2	7.9	10.5	14.5	1.3	18.4	149

質問32　種子島では，地域の人との関係はどうか（該当するもの全て○）

あいさつをする	会話をする	悩みごとの相談	買い物などの手伝い	仕事(農業・漁業など)の手伝い	お年よりへの声かけ	お年よりの病院への送迎	かかわりあいがない	計
96.1	78.9	19.7	10.5	39.5	31.6	1.3	2.6	213

質問33　知っている地域の人の数は，移住する前と今とでは，どちらが多いか

移住する前	現　在	かわらない	計
10.8	68.9	20.3	100%(74)

が大きく変化しており，移住後の方が地域の人間関係がずっと深くなっている。お年寄りの病院への送迎だけは同じであるが，それ以外の全ての項目で移住後の方が関係が増えている。逆に係わり合いがないは，移住後の方が減っている。特に増加が著しいのは，会話をするが28%の増，仕事：農業・漁業などの手伝いが29%の増，お年寄りへの声かけが17%の増などである。同じ人間であっても，住む地域によって人間関係がこのように変わっていくとの意味は大きい。

知っている地域の人の数が移住前と後とでは，どちらが多いかをみると（質問33），現在の方が多いが69%，移住する前の方が多いが11%である。その差は58%であり，圧倒的に現在の方が多く地域の人を知っている。かわらないは20%である。これは，都市と離島との地域の人間関係のあり方を示している。都市の地域の人間関係は匿名的で疎遠であり，お互いに無関心であるが，離島では，地域の人間関係は面接的で親密である。多くの人を知っていることは，そ

れだけ人間関係を豊かにし，孤立感や孤独感を防ぐ。都市と離島という異質な二つの地域を移住によって直接に経験しているだけに，この違いの意味は大きい。この結果から，都市と離島の人間関係を比喩的に言えば，都市における顔の見えない人間関係と，離島における顔の見える人間関係という違いである。これは人間関係の量的な違いではなく，異質な人間関係である。他者を知っているか知らないかは，それほどの違いを生み出す。眼差しを意識しなくてすむ他者は存在しないと同じことであり，“旅の恥はかき捨て”の言葉はこのことを如実に示している。知っている者の眼差しは意味ある眼差しであり，それを受ける者は強く影響される。都市と離島の地域では，同じ地域でもこのような差異がある。

10 離島の魅力

移住者は離島の魅力をどのように思っているのだろうか（質問34）。「もし，あなたがサーフィンをしていなかったら，都市と離島のどちらに住みたいですか」と聞くと，都市が43%，離島が15%，どちらともいえないが42%，であった。離島よりも都市の志向がずっと強い。質問28で，移住前と種子島とではどちらが住みやすいかと聞くと，種子島が49%であり，移住する前が11%であったから，数字的にはそれとは逆の結果がでている。質問28では現在の条件を前提にしているが，質問34では，仮定として，もしサーフィンをしていなかったらとしているので，サーフィンができることが，都市と離島との関係を逆転させていることが分かる。サーフィンが生きがいとなっている人にとっては，それに適した条件を備えている所がベストなのであって，生活はそれに付随している。サーフィンが目的であり，生活は手段である。だから，サーフィンをしていなかったらという条件がつくと，離島と都市の価値は逆転してしまい，一般的な評価と同じになってしまう。

〔離島の魅力〕

質問34　もし，あなたがサーフィンをしていなかったら，都市と離島のどちらに住みたいか

都　市	離　島	どちらともいえない	計
43.4	14.5	42.1	100%(76)

11 過疎地域の活性化

島の活性化とサーフィンとの関係について質問した。まず，「島のサーファー移住は今後，増えると思いますか」と聞くと（質問35），増える85%，かわらない13%，減る１%，であった。増えると考えている者が圧倒的に多い。サーファー移住は10年くらい前からぽつぽつ始まり，最近５年くらいから急に増加し始めている。現在の移住者の４分の３は最近５年以内の移住である。サーフィンは近年急激に普及し始めたスポーツであり，その愛好者がより適する条件を求めて移住するようなれば，島へのサーファー移住者は今後増えると思われる。種子島のサーファー達は，自分の経験を通してそのように予想している。このことは，離島の自然の見直しと活性化につながる可能性を示唆する。

離島への移住にはいくつかの困難が伴う。移住者はサーフィンを最優先させて，それに生活を従属させているが，やはり生活の基盤は重要でる。生活の条件が何らかの形で満たされなければ，いくらサーフィンが好きでも移住はできない。今後，移住サーファーが増えるには何がネックになるのかを聞いた（質問36）。ネックの多い順に並べると次のようになる。仕事がない65%，住まい57%，仕事があっても収入が少

ない30%，地域の人間関係の煩わしさ26%，子供の教育12%，家族の反対７%，である。その他が12%あるが，その理由としては，海が混む４人，「海が人であふれて都会でサーフィンをしているときと変わらなくなる，離島に住んでいる意味がなくなる，かなり自己中心的な意見だけど」１人，医療，病院がない２人，である。ネックとして最も多いのは，仕事がないであり，全体の３人に２人が理由として挙げている。離島の産業構造と深く係わっており，過疎の条件が，移住の障害となっている。次いで多いのが住まいであり，過半数の57%の人が挙げている。都市と比べて移動が極端に少ないので，移動者用のアパートやマンションは非常に限定されているだろうから，空き家などを探すことになるのだろうが，それらは条件の不利なところが多いので，住まいは困難な条件となる。サーファー移住者にとって，仕事と住まいは二大ネックである。この二つに比べれば比重はずっと落ちるが，次は，仕事があっても収入が少ない30%と地域の人間関係の煩わしさ26%，である。前にもみたように，移住者のうち正社員は25%と全体の４分の１に過ぎなかった。最も多いのがパート・アルバイト・フリーターで過半数の57%を占めていた。彼らは種子島の主要産業である農業や漁業あるいは畜産関係のアルバイトで生計を立てたり，また，飲食店などのアルバイトをする。正規の仕事が見つからないために，不安定就業の形で生計を維持しているので，仕事はあっても収入が少ないという回答になった。無職も13%であった。地域の人間関係の煩わしさを挙げる者が26%と，４人に１人あった。都市の人間関係の希薄さとは対照的に，離島では地域の多くの人が顔見知りであり，共同作業をはじめ多くの人間関係がある。そのことは，一面ではプライバシーが少なく，煩わしさともなる。離島の人間関係の濃さが，一部の人に嫌われている。これらの理由よりずっと下がって，子供の教育が12%と１割強，家族の反対が７%，ある。進学や競争という観点からすれば，離島は都市の教育環境に比べ大きなハンディを負っている。教育的な刺激の少なさ，塾の少なさなど，進学競争では離島は不利である。教育→職業という関連が強いほど，教育の意味は大きくなる。だがむしろ，ここでは子供の教育を移住のネックに挙げている人が１割強に過ぎないことに注目すべきだろう。子供の教育への心配はそれほどのネックにはなっていない。移住は生活構造全体を変えるから，家族の抵抗があることは予想される。むしろ，家族の反対が７%しかないことに注目すべきであろう。家族の反対もそれほどのネックにはなっていない。その他の理由としては，海が混むというのが多かった。かれらの多くは，大都市圏である関東や関西のサー

〔過疎地域の活性化〕

質問35　島のサーファー移住は今後，増えると思うか

増える	かわらない	減る	計
85.3	13.3	1.3	100%(75)

質問36　島へのサーファー移住が増えるには，何がネックになるか

仕事がない	仕事があっても収入がすくない	地域の人間関係の煩わしさ	住まい	子供の教育	家族の反対	その他	計
64.5	30.2	26.3	56.6	11.8	6.6	11.8	158

フィンのメッカ，湘南や和歌山の海の混雑を忌避して移住している。そのような観点からするとき，種子島の移住者が増えることは，彼らが忌避した条件がまた起こってしまうことを意味する。

12　人生観

移住サーファーは，いくつかの点で特異な生き方をしている。離島の過疎化が進行し人口，特に若年人口が都市へ流出する中でそれとは逆の動きをしている。また，サーフィンという生きがいが生活よりも優先している。このような点から，彼らの人生観を見ておくことは意味のあることだと思う。

まず，サーフィンをする最も大きな理由をみた（質問37）。その結果は，好きだからが72%と，圧倒的に多い。それよりずっと少なくなって，健康のため14%，大会に出るため３%，プロになるため１%，であった。彼らの多くは，健康とか大会に出るとかプロになるためというような何か目的があってサーフィンをしているのではなく，サーフィンが好きだと，それ自体に価値をおいている。この人達にとっては，好きであることが人生の中心的な価値となっており，生活は後からついて来ている。

彼らにはパート・アルバイト・フリーターが多かったが，将来したい仕事は決まっているのだろうか。それについて聞くと（質問38），決まっているが45%，決まっていないが55%，であった。半数以上は，まだ将来の仕事を決めていない。移住者の内，20代が51%と半数を占めており，フリーター的な感覚が強く，そのことが決まっていないの55%になったと思われる。時代的にみれば，仕事中心から生活中心へ，「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へと動いており，そのような時代的潮流の一つがフリーターの出現であるが，移住サーファーにはフリーター的感覚が強い。

彼らは将来どのような仕事につきたいのだろうか（質問39）。「一生の仕事としてどういうタイプの仕事がしたいですか」と聞くと，多い順に次のようになる。自営業42%，スポーツ・音楽・芸能などの専門職18%，農林漁業10%，公務員５%，民間企業３%，その他22%，である。自営業が圧倒的に多い。フリーター的感覚は，組織に入るのではなく，独立して自分で生きる感覚が強い。公務員と民間企業は合わせても８%である。他は全て，自営業，スポーツ・音楽・芸能などの専門職，農林漁業のいずれも自立的な職業である。スポーツ・音楽・芸能などの専門職が18%あるのは，サーフィンのインストラクターを考えているのではないかと思われる。農林漁業が10%あるのも注目される。彼らの移住前の職業では，農業が１%，漁業が３%であったから，合わせて４%であり，現在の仕事では，農業が８%，漁業が７%であり，合わせて15%であるから，彼らが農業，漁業経験を通して，そこに新規参入していこうとしているのだと思われる。現在，農林漁業の担い手不足が深刻な状況の中で，移住の若者が農業や漁業に新規に参入することは，地域の産業の活性化にとって大きな刺激となる。その他が22%あったが，その内容は，分からないが４人，医療関係が３人，建築業１人，水商売１人，主婦１人，自分に合っている仕事１人，家族のためには何でも１人，自分のやりたい仕事１人，である。具体的には医療関係が目立つが，最も多いのは，「分からない」と「自分のやりたい仕事」など，まだ明確に自分の仕事の内容が決まっていない場合である。ここにも，フリーター的な感覚が現れて

いる。

人生観の一つとして，生きがいと仕事との関係を聞いた（質問40）。生きがいが仕事よりも大切が89％，仕事が生きがいよりも大切が11％，であった。9割が仕事よりも生きがいを大切にしている。サーファー移住者は，仕事を含めた生活の変化の困難さよりも，好きであるサーフィンを優先させ移住しているのだから，この結果は当然である。だが，このような移住は簡単ではない。自分の将来をも決めてしまうからである。高度経済成長が終わって成熟社会に移行し，飢餓から開放され，食べることには不自由しなくなり，生きがいが求められる時代になったことの一つの証左であろう。

心理学者マスローは，生理的欲求から自己実現の欲求への段階的な欲求の移行を主張したが，サーファー移住もその一つの形態だろう。彼らの生き方を通して，時代の変化を読み取ることができる。

次に，時間的パースペクティブの観点から，今と将来のどちらが大事だと思うかを聞いた（質問41）。「将来のために今は耐える」と「今を十分に生きる」の二つの考え方のどちらに同意しますかと聞くと，「今を十分に生きる」53％，「将来のために今は耐える」10％，「どちらとも言えない」37％，であった。将来のために今は耐えるよりも，今を十分に生きるほうが43％も多い。将来の目的の実現のために欲望の満足を延期して，目的の実現に向かって今の努力をするよりも，今を十分に生きようとしている。将来志向ではなく，現在志向である。勤勉・禁欲から欲望開放の時代になったが，そのような時代的動向の一つの現れであろう。サーフィンという今の欲望の実現のために，生活の方を変えるのである。社会構造の“ゆらぎ”の一現象である。このような価値意識の変化が，社会全体でどのようになっているかは，興味ある問題である。

彼らは今何を最も大切だと考えているのだろうか（質問42）。「今の自分にとって最も大切なものは何ですか」と聞くと，次のような結果であった。多い順に，その他64％，サーフィン24％，お金10％，名誉2％，地位0％，であった。この質問の意図は，社会的階層（お金，地位，名誉）と趣味（サーフィン）との価値関係をみようとしたものであり，社会的階層よりも趣味の方が優先されるのではないかと予想した。社会的階層と趣味との関係では，サーフィン24％に対して社会的階層の総計12％であり，予想通りであった。社会的階層の中でも地位は皆無であり，社会的階梯を努力して登っていこうという意識はない。この結果は質問の意図した予想とは外れて，その他が最多であった。その他の中味は，家族が34人，友人が6人，思いやりなどの自分のこころ1人，健康1人，時間1人，楽しむこと1人，である。これらの中には複数の回答で重複しているものもあるが，家族が圧倒的に多いことは注目される。生活構造の基本から変えてサーファー移住するくらいだから，サーフィンの回答が多いと予想したが，予想とは異なって選択肢にはない家族が最多であった。趣味の生きがいを生活よりも優先させ，フリーター的な生き方をしていても，彼らは家族を最も大切だと考えている。

サーファー移住はユニークな生き方なので，彼らがそのことをどのように思っているかをみた（質問43）。「自分の生き方は特別な生き方だと思うか」と聞くと，そうは思わないが84％，そう思うが16％，であった。外から見ると彼らの生き方はユニークにみえるが，彼ら自身は自

〔人生観〕

質問37　サーフィンをする最も大きな理由

好きだから	大会に出るため	プロになるため	健康のため	その他	計
71.6	3.2	1.1	13.7	10.5	100%(75)

質問38　将来どういう仕事がしたいか決まっているか

決まっている	決まっていない	計
45.3	54.7	100%(75)

質問39　一生の仕事としてどういうタイプの仕事がしたいか

農林漁業	民間企業	公務員	教員	自営業	スポーツ・音楽・芸術などの専門職	その他	計
10.3	2.6	5.1	0.0	42.3	17.9	21.8	100%(78)

質問40　生きがいと仕事との関係をどのように考えるか

生きがいが仕事よりも大切	仕事が生きがいよりも大切	計
89.2	10.8	100%(74)

質問41　「将来のために今は耐える」,「今を十分に生きる」の二つの考え方のどちらに同意するか

将来のために今は耐える	今を十分に生きる	どちらとも言えない	計
10.3	52.6	37.2	100%(78)

質問42　今の自分にとって最も大切なものは何か

金	地位	名誉	サーフィン	その他	計
9.6	0.0	2.4	24.1	63.9	100%(83)

質問43　自分の生き方は特別な生き方だと思うか

そう思う	そうは思わない	計
15.8	84.2	100%(76)

質問44　自分の生き方は新しい生き方だと思うか

そう思う	そうは思わない	計
22.7	77.3	100%(75)

質問45　現在の生き方に満足しているか

とても満足している	少し満足	やや不満	不　満	計
46.8	32.5	14.3	6.5	100%(77)

分の生き方を特別な生き方だとは考えていない。同様の質問として,「自分の生き方は新しい生き方だと思うか」(質問44) と聞くと，そうは思わないが77%，そう思うが23%，であった。やはり，かれらの多くは自分の生き方を新しい生き方だとは考えていない。教育が終われば就職して職業につき，終身雇用の下で一生一つの会社で働くという時代が終わり，働くということが人生の大前提であった事態が崩壊しつつある現在，フリーターという新しい就業形態が生まれ，以前に比べれば，働くことや職業の意味が変化している現代において，趣味を優先してサーファー移住することは，特別な生き方でも，新しい生き方でもないのかも分からない。かれらの生き方が社会的通念となっているかどうかは，さらに検討してみる必要がある。だが，働くこと，職業意識についての価値観がゆらいでいることは確かである。彼らの移住はそのような時代的潮流の一つの象徴であろう。

彼らは自分達の生き方にどの程度満足しているのだろうか (質問45)。とても満足しているが47%，少し満足が33%であり，合わせると80%が満足である。やや不満が14%，不満が7%であり，合わせると21%が不満である。半数近くがとても満足しており，最も多い。生きがいを中心とした生き方には，就業形態がフリーターであるような生活の不安定さはあるだろうが，それでも全体的に満足度は高い。

13　社会観

彼らの生き方は，生きている時代や社会と深

く係わっているので，それらについて質問をした。

まず，社会と個人との関係に関する質問をした（質問46）。その結果は，「社会は個人のためにある」が24%，「個人は社会のためにある」が14%，「どちらともいえない」が62%，であった。社会と個人のどちらを中心に考えるかでは，どちらもいえないの判断保留が最多であった。サーファー移住という個人的趣味を優先した生き方は，個人中心の社会観ではないかと予想したが，全体的にはこの点に関してははっきりした結果はでなかった。絶対数としては少ないが，どちらかの回答をした人の間では，個人中心が社会中心よりも10%ほど多かった。全体的にみれば，趣味を中心とした生き方をしているからといって，彼らが個人中心的な考え方をしているわけではない。

次いで，今の社会は生きやすいかどうかを質問した（質問47）。その結果，「生きにくい」が44%，「生きやすい」が19%，「どちらともいえない」が36%，であった。今の社会を生きにくいと感じている者が最も多い。自分の今の生き方には満足しているが，社会は生きにくいという結果になっている。また，今の自分にとって最も大切なものとして，地位は皆無であったことなどから判断して，社会的成功という価値を放棄して，別の観点からすれば新しい価値を求めているのかもしれない。彼らの生き方が既製の社会観を揺るがしていることは間違いない。その背景にあるのは，今の社会が生きにくいという彼らの意識である。

「日本の社会は若者の将来にとって，開かれていると思うか」（質問48）と聞くと，その結果は，「開放的である」が7%，「閉鎖的である」が37%，「どちらともいえない」が56%，であった。どちらともいえないが半数以上と最も多いが，開放的か閉鎖的かを比較すれば，閉鎖的であるが開放的の5倍強ある。回答者は20代と30代の若者が89%を占めていたから，彼らは自分たちにとって，将来が閉鎖的だと判断している。閉鎖的で，生きにくい社会の中で，サーフィンに自分の生きがいを見い出している若者のイメージが浮かぶ。彼らにとって最も大切なものは，地位や名誉や金銭的成功のような社会的価値ではなく，家族なのである。これは，現代社会が生み出した若者の一つの姿であろう。

〔社会観〕

質問46　次の二つの考えのいずれに近いか

社会は個人のためにある	個人は社会のためにある	どちらともいえない	計
23.9	14.1	62.0	100%(71)

質問47　今の社会は，生きやすいかどうか

生きやすい	生きにくい	どちらともいえない	計
19.4	44.4	36.1	100%(72)

質問48　日本の社会は若者の将来にとって，開かれていると思うか

開放的である	閉鎖的である	どちらともいえない	計
7.1	37.1	55.7	100%(70)

14　自然観

サーフィンをすることと自然観との関係はどうであろうか（質問49）。「サーフィンをすることによって，自然一般に対する認識は深まったと思うか」と聞くと，深まったが92%，かわらないが8%，であった。サーフィンは自然を相手にする最も原始的なスポーツだと言われる。彼らは良い波を求めて移動する。サーファー移住はその一つの典型である。防波堤などが出来

ると波が変わってサーフィンには適さなくなることがあるという。種子島で聞いた話しでは，浜の清掃を彼らが定期的に行っていた。南種子町では防波堤の補修工事に対して，その工事が必要以上に大きいと，嘆願書を出していた。自然と一体化したスポーツであるだけに，自然一般に対する認識が深まったと思う者が圧倒的に多く，９割を超える。

〔自然観〕

質問49　サーフィンをすることによって，自然一般に対する認識は深まったと思うか

深まった	かわらない	計
92.1	7.9	100％(76)

15　文化

最後に，中種子町や南種子町において，「サーフィンは一つの文化であると思うか」という質問をした（質問50)。その結果は，そう思うが64％，そうは思わないが36％，であった。サーフィンはそれ自体個人的なスポーツであるが，それが地域の人に共有され愛好されれば，その地域特有の文化にまで昇華することが可能である。食べ物が単に生理的欲求を満たすものから，繊細な加工によって食文化にまで高められたように，サーフィンも単に個人的なスポーツから，離島という特殊な条件の中で，サーフィンに適した波を有し，全国から多くの若者が移住して，地元のサーファーと共に波乗りを楽しみ，一つのサーファー・コミュニティが形成されれば，それは種子島の文化として発展する可能性がある。サーファー誌によれば，全国で最も行きたいところの第一位が種子島であった，ということである。今はまだ移住サーファーの方が数的には多いが，地元にも少しずつ普及し始めており，また地元の高校でもサークルが発足した。種子島の各市町では，サーフィン大会が開催されている。サーフィンはどこでも出来るわけではない。サーフィンに適する波は限られており，好条件を備えた地域は希少である。その条件を生かして生活の中に取り込めば，それは地域特有の文化として立派な価値をもちうる。種子島はその可能性を秘めている。

〔文化〕

質問50　中種子町・南種子町において，サーフィンは一つの文化だと思うか

そう思う	そうは思わない	計
64.0	36.0	100％(75)

全体のまとめ

移住サーファーを人間関係を中心として，それに関連するいくつかの事項を検討したが，最後にそれらを要約しておこう。

移住サーファーは年齢的には，20代と30代とでほぼ９割を占め，若い世代が中心である。40代も少しある。移住サーファーには女性もかなりいて，４割弱がそうである。出身地は全国各地にまたがっているが，特に，関東，関西の大都市圏が多い。移住年数はサーファー移住が最近注目を集めるようになったことを反映して，２年以下が45％を占めているが，６年以上も４分の１ある。家族は一人暮らしが最も多く４割である。学歴は高校が55％と最も多い。移住前の仕事の形態は，パート・アルバイト・フリーターと正社員とがほぼ半々で，いずれも45％程度である。フリーター的な自由のきく就業形態が多いのが特徴的である。移住前の仕事としては，商業・サービス業と工業・建設業が多く，これらの職業はフリーターが入りやすいからで

あろう。現在の仕事の形態としては，パート・アルバイト・フリーターの不安定就業が最も多い。正社員はその半分程度である。離島ではなかなか正規の仕事が見つけにくい状況が分かる。移住前の仕事と比べて，商業・サービス業，工業・建設業が減り，農業，漁業，自営業が増えているのが特徴的である。

サーフィンを始めた時期は，社会に出てからが主で6割である。始めたきっかけは友人が最も多く6割強である。移住による，仕事，生活，人間関係などの環境の変化への不安は，不安と不安はないがほぼ半々であるが，不安がなかった方が少し多い。移住の期間としては，数年間の一時的移住と永住とがほぼ半々である。サーファー移住者には二つのタイプがある。一時的な移住の理由としては，自分の職業選択と将来の生活不安が多く，この二つで5割を占める。仕事，生活の不安が大きい。離島の抱える大きな問題である。84%が条件が許せば種子島に住みたいと思っており，移住者にとって離島の経済基盤が大きなネックになっている。

移住前後の生活を比べると，今の方が楽が多い。パート・アルバイト・フリーターの不安定就業が多いにも係わらず暮らしが楽なのは，金銭的，その他で，離島は生活しやすい条件がそろっているからだろう。6割は今の生活に少し不安を感じているが，4割弱は不安を感じていない。

移住前に比べて，心理状態は全般的によくなっている。変わらないが最も多いが，日頃の不安のみは移住前に比べて今の方が多い。やはり，変わらないが多いが，さびしさ，孤独感は少しではあるが今の方が状態がよい。ストレス，不満感については，絶対的にも今の方がずっと状態がよい。精神的には，都市に比べて離島の方がずっと安定している。

サーファー・コミュニティについても，移住後の方がずっとよい。サーファー友達の数も一般の人よりもずっと多く，41人以上と11～20人がそれぞれ約4分の1と最多である。サーファー同士の面識度も高く，中種子町，南種子町のそれぞれのサーファーの3分の1は，町のサーファーのほぼ全員と，4分の1は，3分の2あるいは半分程度と面識がある。種子島全体となると，面識度は大分落ちて半分以下が多くなる。サーファー友達との関係の内容は多様である。金銭の貸し借りは少ないが（17%），後は物のやりとり（41%）を除いて50%を超える。仕事の相談や悩み事の相談など，深い人間関係であることが分かる。サーファー仲間の接触は非常に多く，62%は毎日顔を会わせている。サーファー仲間の数と連帯はいずれも，移住前に比べて移住後の方がずっと増え，強くなっている。種子島への移住は人間関係において随分，好結果をもたらしている。その結果，多くが（70%）が中種子町や南種子町においてサーファー・コミュニティが形成されていると考えている。

地域についてみると，移住前よりも種子島の方が住みやすいと感じている。一時的な移住が半分程度あるせいか，自治会への加入率は低い（39%）。加入率に比べれば，地域への共同作業への参加率は高い（48%）。移住する前後で，地域の人間関係のあり方を比べると，移住後の方がどの項目においても多くなっており，地域の人との関わりはずっと深くなっている。特に関わりが多くなったのは，会話をする，仕事（農業・漁業など）の手伝い，お年よりへの声かけ，悩み事の相談，である。面識のある地域の人の数も，移住後の方がずっと増えている。移住前に比べて地域の人間関係はずっと深くなっ

ている。

もしサーフィンをしていなかったら，「どちらともいえない」か，あるいは「離島よりも都市に住みい」と思っている。彼らにとって，離島を魅力あるものにしているのはサーフィンである。

ほとんどが島のサーファー移住は増えると考えている（85%）。そのためのネックは主に，仕事がないこと，住まい，である。この二つの条件を解決することが，サーファー移住を増やす上で重要である。

人生観の特徴は次のようであった。彼らがサーフィンをするのは，何か他に目的があるからではなく，好きだからである（72%）。将来の仕事が決まっていない者が多い。一生の仕事としては自営業を多くが望んでいる。生きがいと仕事との関係では，ほとんどが，仕事よりも生きがいが大切だと思っている（89%）。将来と今との関係では，今を十分に生きることを重視している。今の自分にとって最も大切なものは，社会的なもの（金，名誉，地位）ではなく，サーフィンであり，それよりずっと多いのが家族である。彼らは自分の生き方を特別なものとも，新しいものとも思っていない。現在の生き方には，少し満足も加えると，ほとんどが満足している（79%）。

社会観をみると，社会よりも個人を重視しているが，最も多いのは「どちらとも言えない」である。今の社会は生きにくいと考えている者が多い。若者の将来にとっては，閉鎖的な社会だと感じている。最も多いのは「どちらともいえない」である。彼らの社会観はやや悲観的である。

サーフィンをすることによって自然一般に対する認識はとても深まっている。

3分の2は，地域においてサーフィンは一つの文化だと考えている。サーファー仲間が多く，サーフィンは単なる個人的なスポーツではなく，文化にまで昇華されている。

戦後，わが国は経済成長を国家目標とし，高度経済成長の道を突き進んだ。その過程で都市化も急速に進み，多くの農村人口が都市へ流出した。経済成長と都市化の進展の中で，それらに対応するいくつかの価値が優勢になった。物質的な富，大量消費，巨大なビル群や多くの娯楽施設などの人工的建造物への価値である。都市は時代の象徴として巨大な人口を抱え急速に膨張していった。その過程で，物質的・人工的な物が価値あるものとなり，自然の価値は見失われていった。だが，高度経済成長の過程で公害や環境汚染が多発し，経済も低成長の時代に入り，成熟型社会に移行すると共に，自然の価値の見直しが起こった。自然の価値の見直しが叫ばれても，それに伴う人口の移動はあまり多くない。農業への新規参入者が増加したことなどが特徴であった。そのような中で，離島の波を求めてのサーファー移住は特異である。それも少数ではなく，数百名に上ることは注目に値する。波という自然が人口移動をもたらすということは，新しい時代の動向の一つの象徴である。それはまた，波という自然を通した離島の新しい価値の再発見でもある。

自然の資源が少ないわが国で高度経済成長が可能になったのは，人間によるところが大きかった。勤勉という価値は，わが国の中心的価値であった。その時代的象徴として，今でも小学校には二宮金次郎の銅像が残っているところがある。会社人間，モーレツ社員，通勤ラッシュ，残業，長い労働時間，過労死などが，時代の価値を象徴する言葉であった。高度経済成長が破

綻し，ポスト・モダンが叫ばれ，「仕事」から「生活」へ，「物の豊かさ」から「心の豊かさ」への価値が主張され始めた時代において，サーファー移住はその象徴的な一事例である。「生きがい」を優先して生活構造を根幹から変えている。生きがいが目的であり，生活・仕事は手段である。

彼らの移住は，都市と離島の人間関係のあり方を比較する上でも極めて有効である。単なる二地域間の比較ではなく，二地域を同時に経験した同一の人間の経験に基づく比較であるから，その有効性は高い。調査結果によると，移住前よりも，サーファー友達の数や連帯において，また，地域の人との関係において，著しく関係が深くなっている。例えば，地域の人間関係においては，以前よりも，会話，仕事（農業・漁業など）の手伝い，お年よりへの声かけ，悩みごとの相談において，移住後の方がずっと多くなっている。都市と離島を経験した同一の人間が，地域を移住することによって，彼らの人間関係のあり方が変化することは，地域が人間や人間関係を変えるという一つの実験として，きわめて興味深いことである。

移住サーファーが今後，どのように離島に定着するのか否か，地域との彼らの融合関係，などについては，追跡調査をする必要があるし，また，時代の動向を見極める上でも重要な意味をもっている。

付記

この調査は対象者が特定できず，難しいものだった。調査ができたのは，ひとえに，南種子町の松田大児さん，中村いさむさん，中種子町の中村さん（当時，町体育協会に勤務の女性），サーフィン・ショップの，スリースタイルおよびＴ－ＬＡＮＤのおかげでした。記して感謝を申し上げます。飲食店の主人が種子島の人間はおっとりしていると言っていたが，島の人の親切さを身にしみて感じた。